

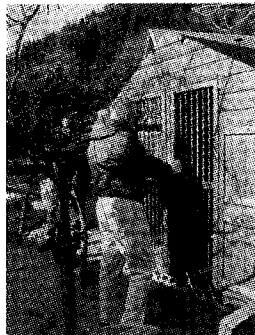
Postscript

Since completing this book, my favourite 'boss' dog, Junket passed away. Of course when dogs get old we know this will happen sooner rather than later. But Junket, despite her 16 years showed few signs of old age, she was full of life and looked like a much younger dog. In October a lump appeared in her mouth. It was removed under surgery and sent to America for analysis. The results indicated malignant cancer and it was only a matter of time before it returned. I watched her closely, fearing this. On November 15th the cancer returned with a vengeance, very suddenly. That night as I slept beside her, I knew she was suffering and a painful decision would have to be made. Early next morning I drove her to the hospital and while I held her closely, the veterinarian gently injected pentobarbital into her vein. She sank in my arms and went to sleep instantaneously. I have always believed that euthanasia is the final act of love any owner can give when their pet is suffering or no longer has 'any quality of life.' To let them linger in pain or discomfort when there is no hope of recovery is cruel. It was because I loved her so much that I chose euthanasia as the kindest option. I shall always remember the many years of happiness she gave me, years that are filled with so many memories.

When dogs or cats leave ARK for new homes, I watch their bewilderment being handed over to a stranger and their worried faces as they look back at me from the car, as they are driven away. Or when I take them to their new home and when I turn to leave, their eyes seem to plead, "Don't leave me here." At this point I always have doubts, "Will they be happy?" "Have I made the right decision?" Of course once they've settled into their new home, they become devoted to their owners and when they visit ARK again, their eyes follow their owner everywhere saying, "please don't leave me here." It is the greatest reward for the staff and myself when we have a reunion with a dog or cat which originally came to ARK in a pitiful condition but is now healthy and happy and loved by a new owner. It makes our work, however hard, worthwhile.



オリバーさんの小さなテーブルから始まった「ARK」の活動は、会員の皆さんの理解と支援に守られて、今も続いています。私は、このオリバーさんのエッセイの中に、会員の皆さんをはじめ、多くの方々によって救われたいくつものいのちを見つけました。皆さんに手を差し伸べられた、そんな動物達の物語を是非読んで下さい。



アークスタッフ/小椋朋子

お申し込み方法

郵送先の御住所とお名前、お電話番号、必要冊数を明記の上、ファックスか郵便でお申し込み下さい。なお郵送料は別途必要です。(一冊の場合: 310円)

富文社出版刊

1,800円(ファックス税90円)、四六版、ハードカバー、2月15日発売、200頁、カラー、モノクロ写真満載

Best Friends 犬と分かちあう人生

この本を書き終えた十一月の半ば、わたしの犬のお気に入りの「ボス」犬、ジャンケットが亡くなりました。どの犬だって年をとれば、いずれはこうなるのですから、ジャンケットにもその日はまもなく来るだろうと、わがっではいました。それでもジャンケットは、少しも年齢を感じさせず生命力にあふれ、すい分と苦々しい犬に見えたものです。

十月でしたが、彼女の口の中にしこりが一つできました。手術でそれを取り除き、アメリカに送ってどんなものを分析してもらうことにしました。結果は、そのしこりが悪性腫瘍で、再発は時間の問題であると記されていました。わたしは再発を恐れながら、ジャンケットをじっと見守っておりました。十一月十五日、腫瘍は突然に強烈に再発したのです。その夜、そばで眠っていると、ジャンケットが苦痛に苦しんでいるのがわかりました。わたしは、辛い決心をするときが来たと思いました。

つぎの朝、病院へ車でジャンケットを運び、わたしがしっかりと抱いている間に、獣医はジャンケットの血管に、ヘントバルビタールの催眠剤を、静かに注射いたしました。するとジャンケットは、わたしの両腕の中に深く身を流めると、たちまち眠りにつきました。

ベッドが苦痛にさいなまれているとき、あるいは「もはや生きている状態ではない」とき、安楽死は、飼い主がベッドに与えられる最後の愛情表現だとわたしは信じています。苦痛をながびかせたまにしておいたり、回復の見込みがひとつもないまま苦しませておくのは、残酷でしかありません。

わたしはジャンケットを、とても愛しておりました。だから、最善の選択として安楽死を選びました。長い年月でジャンケットがわたしにくれた、たくさんの喜びを決して忘れはしません。ほんとに思い出いっぱいの日々でした。

アークから犬や猫たちが、新しい家族のもとに移って行くとき、彼らが見せるとまといや心配気な表情を、わたしはいつも見つめています。車で立ち去るとき、彼らは車の窓越しにこちらを振り返って見えています。また、わたしが新しい家に連れて行き、帰って来ようとするとき、彼らの目はまるで、「ここに置いて行かないで」と断えているようです。そんなときわたしはいつも、これでいいのと自問自答するのです。「この犬は、幸せになれるだろうか?」「わたしの決定は、正しいのだろうか?」

それにしても、いったん新しい家に落ち着いたペットたちが、アークを再訪して見せる態度は、飼い主への献身的な愛情なんですね。飼い主の動きから目を離そうともしません。彼らの目は、「どうぞ、ここに置いていかないで」と言っているのです。

こういふときこそ、彼らから素晴らしいお返しを受け取ったと、わたしたちは感じます。アークに初めてやって来たときには、悲惨な姿であつたのに、新しい家族と一緒にまた来てくれる犬や猫たちが、健康で楽しそうで、飼い主に愛されているのがよくわかるからです。アークの仕事がいくら大変でも、骨折りがいいがあるというものです。

——— あとがきより

